令和3年度博物館事業評価

資料1-2

戦略指標1　資料収集と保管・活用

・地域を特徴づける資料収集と保管　　・資料データ化と収蔵資料の充実　　・地域の文化を地域で保管活用

定量的評価

No.	内容	単位	R3 目標値	R1 実績値	R2 実績値	R3 実績値	考え方・基準	R3内訳等説明
1	新規受入資料件数	件	20	49	38	27	当該年度の受入件数	考古3件・歴史15件・民俗9件
2	収蔵資料台帳のデジタル化件数（累計）	件	83,737	81,560	82,737	85,555	年度末におけるデジタル台帳の登録件数（中期目標：R7年度100,000件）	・舞阪郷土資料館分1,135点は委託 ※達成率で示す予定であったが、市内部の別の事業評価で、同じ項目を累計で示しているため、統一を図った。
3	【新規】 新規受入資料の展示公開率	%	70	－	－	31	当該年度とその前年度の受入資料件数のうち、展示公開した件数の比率	展示公開に向かない資料、調査や修繕を要する資料があるため、比率が低くなっている。
4	収蔵品オンライン検索システム「ある蔵」における公開件数（累計）	件	12,000	11,821	11,971	11,992	年度末時点における「ある蔵」での公開件数 （中期目標：R7年度12,500件）	・掲載内容の充実を重視する中で、目標件数を満たすことができなかった。 ※達成率で示す予定であったが、市内部の別の事業評価で、同じ項目を累計で行っているため、統一を図った。
5	【新規】 館内収蔵庫の点検・清掃回数	件	12	－	－	12	温湿度等環境の点検及び庫内清掃の回数	温湿度の点検を月に1回行い、適宜除湿、放熱、清掃等を実施した。
6	資料事故発生件数	件	0	0	0	6	資料の紛失、破損、汚損等の件数	資料6点の所在不明が判明した。

定性的評価　（A達成　Bおおむね達成　Cもう少しで達成　D達成していない）

No.	評価項目	見直し	R1	R2	R3	判断基準	R3説明
1	計画的な資料収集が行われている。	必要	－	－	A	・資料収集方針・資料購入基準に基づいている。	・方針・基準に基づき収集した。
					B	・現状の収蔵環境を踏まえながら、収集検討会議により受入を決定している。	・検討会議は開催していたが、会議記録を作成していない。
					B	・資料購入評価会の構成員をあらかじめ想定し、すぐに対応できるようにしている。	・博物館協議会や文化財保護審議会経験者を想定していたが、案件がなかった。

2	資料の保管が確実になされ、良好な状態に保たれている。	必要	－	－	B	・資料管理のフローチャートが運用されている。	・概ねフローチャートに沿って行われた。
					B	・収蔵庫の鍵の管理や機械警備の運用が厳格に行われている。	・鍵は年度途中から施錠式キーボックスに収納し、使用時は他者の確認を必須とした。 ・機械警備は夜間全館、通常時は収蔵庫で行っている。
					D	・資料の収蔵場所を明確にするとともに、その場所への収蔵が確実に行われている。	・資料6点の所在不明が判明した。 ・本来位置にない資料が多い。R3年度は使った資料を元の位置へ戻すことを徹底した。
					C	・全ての収蔵施設におけるデジタル台帳作成が計画的に行われている。	・未整備施設を順次進めている(R3舞阪)が、目標時期を定めた全体計画が未作成である。
					C	・収蔵庫の温湿度計測を常に行い、必要な措置を講じている。	・空調設備が無い。常時温湿度を計測し必要に応じ一般の除湿機等で対応した。
3	全ての収蔵施設が計画的に運用されている。	必要	－	－	C	・全ての収蔵施設について毎年現地点検を行い、必要な措置を講じている。	・年間通じて一度も行けなかった施設が存在した。
					D	・全ての収蔵施設の資料を把握し、将来的な再配置の方針が検討されている。	・各施設の資料把握は途上であり、再配置の方針も具体化していない。
4	収蔵資料の活用と見直しが図られている。	必要	－	－	B	・デジタルデータの公開活用が推進されている。	・「ある蔵」や「文化遺産デジタルアーカイブ」で推進しているが、利便性に改善の余地有。
					C	・未整理資料や再整理を要する資料の活用に向けた確認・整理作業が推進されている。	・伊場遺跡群弥生時代資料の再整理などを進めたが、未着手のものが多い。
					A	・他館への資料貸出や画像提供、資料熟覧への対応が適切に行われている。	・適切に対応した。

自己評価

分析・課題	◆資料の収集については、収集方針・購入基準に沿って行われたが、収集検討会議が口頭で行われているため、後の時代に受入れ理由などが伝えられない。 ◆資料の保管については、収蔵庫の飽和状態が進んでおり、本来の位置に配架されていない資料も多く、資料の所在不明も判明している。また、未調査資料や、収蔵経緯・履歴が不明な資料が存在する。なお、本館以外の収蔵施設は環境や保安の面で課題を抱えるが、遠隔地で資料の状況を頻繁に把握できない面がある。 ◆資料の活用については、デジタル化推進や外部利用対応は進められているが、未整理資料・要再整理資料の整理や新着資料の公開はあまり進んでいない。
今後の方策	◆資料の収集については、限られた収蔵スペースの中で有効な収集を行うため、収集検討会議を強化して記録を残すこととし、系統立った所蔵資料の選定を行っていく。 ◆資料の管理については、収蔵庫内の再整理や資料点検を強化し、その結果をデジタル台帳や配架表に反映させる中で、資料情報の充実と集約を図る。また、市内に分散する収蔵施設についても定期的に巡回確認を行うことで適正な管理に努め、将来的には地域性に加えて資料の重要度や材質、劣化状況などによる収蔵資料の仕分けを全体的に行い、適切な物品管理体制を構築していく。 ◆資料の活用については、上記の収蔵庫再整理・資料点検を行う中で、所蔵資料の活用に向けた情報を収集し、オンラインでの公開などを推進していく。

博物館協議会委員からの意見・評価

戦略指標1　資料収集と保管・活用

【定量的評価に関する意見】

◆収蔵資料台帳のデジタル化は順調に進んでおり、収蔵品オンライン検索システム「ある蔵」における公開件数も増加はしているが、目標値に到達できなかったことは残念であった。また、６点の資料の所在が不明であることは大きな問題である。とはいえ、これまでに表面化しなかった所在不明を明らかにしたこと自体は評価できる。明示化したことにより、市民からの批判等が寄せられたが、その後、一部の資料が発見（確認）されるなどにつながった。新規項目としてあげられている、館内収蔵庫の点検、清掃回数も月に１回、きちんと行われていることもよかった。
◆資料収集と保管・活用について、目標値の設定基準を示した方がいいのではないか。目標値は、実現可能性が高いものにしないと評価することで却ってマイナスの影響を与えてしまう可能性があると思う。
◆「№3：新規受入資料の展示公開率」は、指標として再検討の余地があると感じる。新規受け入れ分に限らず修繕や調査を要する資料があるのであれば、それら修繕や調査が実施されたかどうかも指標となるのではないか。
◆「№3：新規受入資料の展示公開率」については、説明欄に示された「展示公開に向かない資料、調査や修繕を要する資料があるため、比率が低くなっている」という説明が妥当と思われる。新規受入資料については十分な調査を施した上での公開が望ましいので、緊急的公開の必要性がなければ、公開を焦るべきではないだろう。そうした意味では目標達成を求めすぎると、かえって拙速な公開に陥ってしまう可能性が否めないので、慎重な評価運用をお願いしたいと思う。
◆「№1：新規受入件数」「№3：新規受入資料の展示公開率」は目標値を設定するのが難しいと感じました（№1は数が多ければ良いというものではない。№3は展示に向かない資料があるとのことなので）。
◆定量目標の数値が全体の何パーセントを占めるのか、目標数値だけからは見えにくい。例えば、デジタル化は全収蔵資料の何パーセントが公開されているのか、内訳説明に明記してもらいたい。
◆資料の一時紛失について、資料の新規受け入れから一貫した管理と運用をお願いしたい。
◆予算・保管スペース・管理・調査研究等様々な事柄が発生するので、テーマを決め系統立った収蔵はとても重要である。

【定性的評価に関する意見・評価】（A達成　Bおおむね達成　Cもう少しで達成　D達成していない）

№.	評価項目	見直しの要・不要	段階評価	委員の意見・評価等コメント
1	計画的な資料収集が行われている。	必要7人 不要1人	B:8人	◆資料収集方針・資料購入基準に計画的な資料収集が行われており、現状を踏まえつつ収集検討会議により受入を決定していることは評価できる。 ◆将来のために、資料受け入れの経緯や理由を記録することは必要である。 ◆実験記録がそうであるように、収集の目的や過程の記録は研究資料と同様かつ同等の意味がある。検討会議の記録はぜひ作成・保管を。 ◆会議記録作成が必要 ◆資料収集方針・資料購入基準を文書化したことは評価できる。できるだけ早くホームページ等で公開することが望ましい。 ◆資料収集の方針が気になった。 ◆収集検討会議の会議記録を作成していない理由は？

2	資料の保管が確実になされ、良好な状態に保たれている。	必要8人	C:4人 D:4人	◆資料管理のフローチャートが運用されており、収蔵庫の鍵の管理や機械警備の運用が厳格に行われていることは評価できる。しかし資料の収蔵場所の明確化や収蔵すべき場所に確実に収蔵されていないことが、収蔵品の行方不明につながったことは非常に残念であった。収蔵庫の整理整頓に努め、収蔵場所への確実な収蔵が必要である。 ◆所在不明の資料が判明したことを重く受けとめ、デジタル台帳の作成を優先させる必要がある。職員だけで対応できない場合は、外部委託という方法も検討した方がよい。 ◆紛失事案が再発しないよう、保管方法の徹底、早期のデジタル台帳化（画像含む）に取り組むこと。 ◆「本来の位置に配架されていない資料が多い」というのは事故の原因となりかねない。行政職からの人事異動によって学芸員になる際には、大学での学芸員資格科目の再履修に準じるレベルでの、博物館の管理・運営・調査・研究に関する研修が必要ではないか。 ◆「収蔵経緯・履歴が不明な資料が存在する」というのも問題が大きい。収集検討会議とあわせて、収蔵の経緯・履歴もきちんとした管理が望ましい。 ◆収蔵資料の紛失は管理体制の不備から生じていると思われることから、人員体制や予算措置を講じ、資料管理のあり方を見直してほしい。 ◆資料の収蔵や保存にはコストがかかる。文化庁の資料の取扱いの今後のあり方でも全てをそのまま将来にわたり保管・管理していくことは適切ではない、要否選択する必要性があるとされていた。 ◆資料の管理には注意し、修繕が必要なものは、積極的に修繕していただきたい。 ◆保管は湿度計と除湿器でのみで対応とのことですが、今後空調設備が整う予定はあるのか？
3	全ての収蔵施設が計画的に運用されている。	必要8人	C:4人 D:4人	◆全ての収蔵施設について毎年現地点検を行っているというものの、全ての資料を把握しているとは言い難いことは早急に改善の必要がある。 ◆年間予定として、あらかじめ資料の点検日を設定すればよいのではないか。 ◆資料の点検や管理は学芸員が片手間でどうにかなるものではない。専従または専任の資料管理係への人員配置を早急に検討してほしい。 ◆1度も行けなかった施設があったとのことなので、徹底できるとよい。 ◆全ての所蔵資料の把握は最重要課題ではないか。 ◆「本館以外の収蔵施設は資料の状況を頻繁に把握できない面がある」というのは、優先的に改善してほしい。
4	収蔵資料の活用と見直しが図られている。	必要8人	B:3人 C:5人	◆収蔵資料の他館への貸し出しなどが行われていることやデジタルデータの公開活用が推進されていることは評価できるが、資料整理が未完了である点については速やかに改善する必要がある。 ◆まずは、収蔵品データのデジタル化を推進し,その後活用方法を考えるのが良い。 ◆整理を要する資料はどのくらいあるのか。それら整理が、現状の人員・資材等で不可能であれば、対応措置を検討いただきたい。 ◆未整理資料をなくす、または減らすことをしないと資料の所在不明につながるのではないか。 ◆改正された博物館法にもデジタル・アーカイブの推進が明記されている。未整理資料の再整理やデジタル化を進め、市民が資料にアクセスできる環境を整えることは極めて重要で、優先的に取り組んでもらいたい。 ◆所蔵資料の活用について、一般/専門が何を望んでいるか情報収集し希望に添えるか検討してほしい。 ◆デジタルアーカイブの利便性については、具体的な改善を検討してほしい。 ◆デジタルデータの画像を大きくし、将来的には3D化して充実を図りたい。

【その他意見等】

資料の収集についてはほぼ適切になされていると考えられるが、整理や管理、活用といった点においては課題が多いので、計画的に軌道に載せていくことが必要であると考えられる。
◆展覧会事業や教育普及事業に比べて、収蔵資料の整理や管理に人員・予算を投下できていない現状を改善を進めてほしい。特に収集のプロセス（収集理由や経緯）といった情報の管理には細心の注意を払い、資料と情報がばらばらにならないように保存・保管する体制と、収集方針も計画・実施、内部での検証・再考・見直し・改善のフレームワークの構築を強く求めたい。特に資料管理の方針に基づき、①資料収集、②資料の情報、③資料のアクセス、④資料の管理保存、と４つの視点から見直しをはかることを期待する。
◆必要だとわかっているのに進まない作業がある場合は、根本的な原因を究明し、対応策を講じる必要がある。職員の努力や頑張りでカバーしきれない問題については、適切な方法で対処する必要があると思う。
◆全体として、施設や人的資源の不備・不足が、足を引っ張っている印象を受ける。必要な予算措置が講じられることを望む。
◆改善のために人員や時間が必要なのが問題ですが、デジタル化には特に力を入れたい。

戦略指標2　調査研究

・学芸員の質の向上　・地域の研究機関との共同研究　・地域資料の掘り起こし

定量的評価

No.	内容	単位	R3 目標値	R1 実績値	R2 実績値	R3 実績値	考え方・基準	R3内訳等説明
1	【新規】学芸員が講演・講座等の講師を務めた件数（外部での実施を含む）	件	15	－	－	12	当館学芸員による講師件数。ギャラリートーク、学校対応、展示ガイドは含めない。出前講座は含む。連続講座は1回。	展示関連講座3件（縄文食、蜆塚WS、浜松城絵図）、連続講座3件（家康伝承調査・初歩の古文書、ボランティア養成）、出前講座6件
2	【新規】学芸員の学術的著述本数（外部での掲載を含む）	本	3	－	－	3	館報・図録・報告書や、外部研究誌等へ記名の著述掲載本数。連載は1本。1人1本目標。	学芸員A：1本（外部）、学芸員B：2本（館報）
3	【新規】学芸員が調査に出向いた件数	件	15	－	－	24	外部での資料調査、熟覧、視察など。同一調査に複数回でも1件。	歴史19件、民俗4件、考古1件
4	【修正】他機関と連携した調査研究の件数	件	6	－	－	6	大学、機関、研究者等との調査研究連携件数。イベント等のみは含まない	静岡文芸大（染色型紙）、静岡大2（滝沢鍾乳洞・蜆塚遺跡）、根堅遺跡調査団、豊橋市自然史博物館（蜆塚遺跡）、大橋幡岩資料調査プロジェクト（大橋ピアノ）

定性的評価　（A達成　Bおおむね達成　Cもう少しで達成　D達成していない）

No.	評価項目	見直し	R1	R2	R3	判断基準	R3説明
1	市役所の組織の中で、博物館が調査研究施設として位置づけられている。	必要	－	－	C	・調査研究とその他業務における適切な業務量のバランス配分と役割分担がされている	調査研究のほか、資料収集管理・展示公開・教育普及・行政的な事務などを行っており、調査研究の比重は少ない。
2	調査研究の環境が保たれている。	必要	－	－	D	・調査研究に必要なスペースが確保され、機材が適切に配備されている	・館内に資料や物品が飽和状態で、調査研究できるスペースは少ない。 ・機材の一部に老朽化で使用できないものがある。
					C	・調査研究スペースにおいて整理・整頓が日常的に行われている。	・調査研究スペース確保のための整理・整頓の実施途上である。
					B	・調査、視察、研修、有識者指導など学芸員の資質向上に必要な予算が確保されている	・図書購入費や出張費等の予算はおおむね確保されている。

3	博物館が市民や外部の組織などから調査研究施設として位置付けられている。	必要	－	－	C	・設定されたテーマに基づいた調査研究が計画的に行われ、講座等で市民に還元している。	・「家康伝承」「蜆塚遺跡」「伊場遺跡群」など継続中の調査研究が多く、講座等での還元は主にR4以降の予定である。
			－	－	B	・学芸員が外部機関との共同研究に参画している	・「機械染色の型紙」は大学側と覚書を締結して進めている。

自己評価

分析・課題	◆学芸員が事務・調整的な業務等も抱え、物理的な調査研究スペースも少ない中で、調査研究活動への比重は低い。成果を示す場である講座や学術的著述はやや低調であったが、資料の現地調査は精力的に行った。 ◆令和３年度は、「家康伝承調査事業」「蜆塚遺跡保存活用計画事業」「伊場遺跡群弥生時代資料再検討事業」や、静岡文化芸術大学との「浜松の染色の型紙」共同研究事業など継続中の調査研究事業が多く、それらの調査成果の公開は主に令和４年度以降になる予定である。 ◆外部機関との共同研究は行われているが、資料や情報の提供が主体である。
今後の方策	◆継続中の調査研究事業を引き続き推進していくとともに、外部との連携による調査研究について積極的に検討していく。 ◆業務の分担や内容の見直し、調査研究スペースの環境改善を進め、学芸員業務の調査研究に対する比重を向上させる。その調査研究で得られた成果を展示や講座等によって市民へ還元する。 ◆職員の専門性や使命感を高めるために研修等の積極的参加を促す。

博物館協議会委員からの意見・評価

戦略指標2　調査研究

【定量的評価に関する意見】

◆学芸員によるギャラリートークや出前講座など目標値にはやや届かなかったものの、学芸員の学術的著作や調査研究など意欲的に行われており、特に他大学と連携した調査研究は、地元の静岡文芸大学や静岡大学と行っており、また豊橋市自然史博物館とも協働するなど評価できる。
◆目標を達成できている項目が多いが、重要なのは、講座内容や論文、調査の内容である。本数や件数だけでなく、博物館の展示や研究と関連した論文内容や調査研究であるかどうかも評価した方が良い。
◆「№2：学術的著述本数」は、媒体の発行時期により単年度計測だとゼロになることもあり得る。ある程度長期の視野で評価すべきではないか。
◆「№3：調査に出向いた件数」について、資料の管理とも関連するが、内部の資料調査は評価対象にならないのであろうか。内部であれ外部であれ、調査は評価されるべきと考える。
◆「№3：学芸員が調査に出向いた件数」学芸員の質の向上において、出向き調査は有効である。量は目標を大幅に上回っているので、質の向上が今後の課題か。
◆浜松市が期待する博物館の役割、あるべき姿を明確にし、その実現のために必要な人員・予算等をしっかり確保すべきである。調査研究は業務の片手間にできるものではなく、時間もお金も必要であることを市民に周知し理解してもらう努力も必要であり、博物館職員のみに任せるのではなく、各層での取り組みが必要と思われる。
◆定量的評価については、R3年度の実績値と内訳等説明をみた限り、十分な成果を遂げていると思う。
◆コロナ禍でありながら外部調査や他機関との連携も数多くされていると感じた。
◆講座・講演の回数が目標数をやや下回っているが、今後とも積極的に実行、実施してほしい。

【定性的評価に関する意見・評価】　（A達成　Bおおむね達成　Cもう少しで達成　D達成していない）

№.	評価項目	見直しの要・不要	段階評価	委員の意見・評価等コメント
1	市役所の組織の中で、博物館が調査研究施設として位置づけられている。	必要8人	C:6人 D:2人	◆特に調査研究にあたる学芸員が収蔵品の管理・活用や行政的な事務等に多くの時間を割かれており、研究に割ける時間が少ないと思われる。収蔵品については専門分野ともいえるのでやむを得ないところがあるが、もう少し研究時間を割ける環境整備が必要である。 ◆研究のための人員、あるいは時間の確保を進めることが必要ではないか。 ◆学芸員の調査・研究が進むような環境の整備、物理的スペースに加えて、人員体制の強化をはかってもらいたい。例えば、事務職員の増員など。 ◆事務的な作業をする人員と、調査研究をする人員の配置が必要ではないか。 ◆資料の収集や管理保管で大部分の人工数になっていると予想される。分業できると良い。 ◆すでにそのようにされているかもしれませんが、資料収集管理、展示公開、行政対応など、研究以外の仕事は、仕事量よりも個人の適性に合わせて役割分担をしたほうが精神的負担が減るように感じる。
2	調査研究の環境が保たれている。	必要8人	B:1人 C:4人 D:3人	◆多忙なこともあるのだろうと思うが、調査研究に必要な場所の確保やそのための整理整頓などをきちんとできるような環境整備に努めるべきであろう。図書購入費や調査や研修のための予算は概ね確保されており、その意味での経済的な環境は適切であると考えられる。 ◆現場を拝見していないので分からないが、スペースの確保や整理整頓は工夫や努力で改善できる部分があるように感じる。整理収納アドバイザーなどに指導を仰ぐのも良いのではないか。 ◆コストにそれほど問題がないとすると使用方法に問題があるのか。 ◆調査研究ができるスペースがなく、使用できない機材があるという問題は、至急、対応すべき重要な課題である。 ◆調査研究のためのスペースや機材の確保につき、必要な部分は予算化を検討しては如何か。

3	博物館が市民や外部の組織などから調査研究施設として位置付けられている。	必要8人	B:3人 C:5人	◆家康伝承や蜆塚遺跡などについての調査研究を継続しており、講座等を通じて市民に還元する準備を進めていることは評価できる。外部機関との連携もさまざまな形で進められている。 ◆求められる調査研究と、専門領域などにおいて適切な研究員が配置されているかどうか。 ◆調査研究の成果還元は来年度以降に期待したい。 ◆個人的には認知度は低いと感じる。

【その他意見等】

◆市民のための学習施設でありつつも、浜松市の歴史的な調査研究を担う研究機関としての役割を果たすためには、学芸員が安心して調査研究を進めることができる環境整備が必須と思われる。そのためには博物館自体の努力もさることながら、浜松市全体が博物館（文化財課）をそのように位置づけ、適切な人材配置をすることが必要である。
◆（1）最大かつ総括的な課題は現在の学芸員の任用システムではないか。行政職からの人事異動によって数年の期間限定で学芸員職に就き、その後、人事異動によって行政職に戻るシステムでは、展望を持った（目的を見据えた、骨太な）調査・研究は困難かと思われる。当面、現行の任用制度を運用するならば、学芸員には大学等での再履修等を通じての再研修を設けてはどうだろうか。たとえば静岡文化芸術大学においては「博物館学概論」「博物館運営論」「博物館経営論」「博物館教育論」「博物館資料論」「博物館情報・メディア論」等が開講されているので、学芸員は在職中にそうした講座の中から週1回、1講座を履修してみるような制度の運用も考えられる。
（2）研究環境において「図書購入費や出張費等の予算はおおむね確保されている」のは、当然というか、むしろ必要最低限の環境であり、それをもって「B」と評価するのはいささか納得できない。学芸員を「調査・研究職」として位置づける必要とあわせて、大学等の研究機関に倣った定額的研究費の設定が必要ではないだろうか。具体的にいえば、たとえば小職の勤務校においては教員には一律的に年額50万円の「教員研究費」が配分されている。もちろんまったく自由に使用できるというものではなく、執行については事務局の財務担当部署や総務担当部署によって厳正に管理されているが、それでも自身の調査・研究については、自己の自律的運用が前提となっている。大学や研究機関によって金額の差はあるにしても、研究者が自身の自律的な調査・研究課題に取り組むには、そうした自律的企画・運用が可能な研究費の確保が不可欠だろう。
（3）調査・研究の意識向上の機会として学会（の大会や例会等）への定期的な参加も不可欠である。なるべくならば、自身の研究を発表する場としても関連学会への積極的な参加は奨励それるべきかと思う。しかし、行政職からの異動による数年の任用期間しかない現行の学芸員では、学会費（年会費）や大会参加費を自己負担しなければならないとしたら、職務に関する自費負担はモチベーションの低下にもつながりかねないだろう。学会の年会費や大会参加費について、学芸員としての任用期間中のフォローがあってもよいのではないか。
◆博物館が調査や研究のための施設だという認識は一般人にはあまりないと思うので、もっとアピールしたほうが良いと思います（学芸員のやりがいにつながる）
◆専門的な調査研究には膨大な時間と労力を要するため、学芸員の環境を整える必要がある。また、その成果を内外に発信する仕組みを構築することが望ましい。
◆調査・研究は収集・展示・教育普及など博物館の諸機能に係わる重要な要素なので、何よりも学芸員が調査・研究に専念できる環境を整えてほしい。

戦略指標3　展示・教育普及活動

・浜松市と関連のある展示の企画　　・学校や地域と連携した講座やイベントの開催

定量的評価

No.	内容	単位	R3 目標値	R1 実績値	R2 実績値	R3 実績値	考え方・基準	R3内訳等説明
1	年間観覧者数（本館）	人	43,000	32,540	24,032	29,311	本館合計（アウトリーチを除く）	新型コロナの影響から若干回復している。
2	年間観覧者数（分館合計）	人	28,000	27,248	18,108	21,762	5館合計	舞阪5,212人、姫街道と銅鐸資料館4,177人、浜北9,876人、春野1,129人、水窪1,369人
3	企画展開催件数	件	6	11	8	7	特別展、テーマ展、小展示が対象（スポット展示や外部での展示は含めない）	テーマ展3件、小展示4件
4	【新規】企画展の満足度	点	7.5	－	－	7.5	アンケートでの採点（0～10点）の平均値。展示毎に算出し、その平均値とする。	対象：「新収蔵品展」「古墳へでかけよう」 ※その他は計測が以前の方法のため対象外。
5	【修正】分館における企画展開催件数	件	12	10	13	18	本館巡回展や企画展のほか、分館の所管部署や指定管理者主体の展示も含む。	本館主体10件、分館主体8件
6	【新規】講座開催件数	件	20	－	－	9	館主催の講演会・講座の回数。ギャラリートーク、出前講座は含まず。連続講座は1回。	展示関連講座3件、連続講座3件、外部講師3件
7	【新規】体験事業満足度	%	95	－	－	99	アンケートでの4段階評価（良・やや良・やや悪・悪）の良・やや良の割合。事業毎に算出し、その平均値とする。	対象：長期休暇の体験館（GW・夏・冬・春）、火おこし、縄文のくらし、年賀状、味噌、昔のくらし、古代アクセサリー
8	学校移動博物館（職員派遣型）開催件数	件	6	10	8	10	学校へ博物館職員が出向く形での展示・体験学習の実施件数。	三ヶ日東、河輪、大平台、城北、相生、北浜東、熊、佐久間、雄踏小中ノ町
9	教材貸出件数	件	100	114	101	99	学校等への教材用資料や体験学習用具の貸出件数。	学校移動博物館（貸出型）57件、それ以外の貸出（個別資料、体験道具等）42件
10	各種研修生の延べ受入人数	人	300	211	145	77	博物館実習、インターン、職場体験、教職員研修などの延べ人数。※R3は新型コロナウイルスにより、インターンは中止。	博物館実習60人（10人×6日）、職場体験4人、教職員研修13人　※学校移動博物館（派遣型）開催時の教職員研修を実施しなかった。
11	【新規】常設展内の資料更新回数	件	4	－	－	2	常設展の部分的な展示更新の回数（期間限定の逸品展示を含む）。	蜆塚遺跡展示内容の更新、伊場遺跡展示内容の更新。
12	【新規】レファレンス対応件数	件	40	－	－	31	来館、メール、電話等による件数合計。	目標値に届かなかったが適切に対応した。

定性的評価　（A達成　Bおおむね達成　Cもう少しで達成　D達成していない）

№.	評価項目	見直し	R1	R2	R3	判断基準	R3説明
1	本館は、市内の歴史文化について正確でわかりやすい解説が行われており、市内外の人びとが浜松市を理解し、知的好奇心を満たすことができる場である。	必要	－	－	D	・常設展の魅力向上に取り組むとともに、UD化を進めている。	・修正の検討を行ったが、実施には至らなかった。
					B	・計画的な企画展の開催により、収蔵資料を効果的に公開している。	・一部変更となったが、おおむね計画的であった。
					B	・展示や教育普及事業において、デジタル技術を活かした効果的な事業展開を行っている。	・講座のオンライン配信、参加申込のオンライン化、QRコードを用いた展示関連資料のダウンロードなどをR3年度から開始した。
					B	・速報展など時節や市民ニーズに即応した柔軟な事業展開を行っている	・高林家の展示は市美術館の民藝展と時期を合わせ、夏に五輪の展示、発掘速報展を兼ねた古墳の展示など事業展開を工夫した。
2	分館は、各地域の歴史文化について正確でわかりやすい解説が行われており、知的好奇心を満たすことができる場である。	必要	－	－	B	・各地域の特色を生かした常設展示が行われている。	各地の文化財や歴史に関する展示を残しているが、長年更新されず情報が古い面がある。
					B	・各分館の地域の人々や担当者の意見や要望が、企画展示等の事業に反映されている。	各分館の担当者と調整して企画展の内容を決定しており、各担当部署や指定管理者が自主事業も行っている。周知の面で課題を残す。
3	（内容変更）学校の学習内容に即した見学・体験のプログラムを行うとともに、授業を支援する教材を提供している。	不要	－	－	A	・主に小学校3年生と6年生の学習内容に合わせた見学・体験プログラムが構成されている。	3年生には昔の道具の体験や展示、6年生には遺跡見学や展示解説などを用意している。
					A	・学校のニーズ等を把握し、見学・体験プログラムの改善に努めている。	学校移動博物館（派遣型）の際に、その地域独自の資料や歴史資源を紹介するなど、歴史を身近に感じられるよう努めている。
					C	・デジタル技術を用いたオンライン上での学習支援を進めている。	動画配信や子供向けウェブページなどの検討を開始している。
4	（新規）市民に学びの場を提供している。	必要	－	－	C	・来館者が理解を深められるような効果的な講座や展示解説等を開催している。	講座や展示解説は、企画展示開催時や学校の長期休暇時が主で、常時は行っていない。
					B	・レファレンスには丁寧に対応し、適切な説明を行っている。	市民のレファレンスや資料閲覧スペースは無いが、丁寧な対応、適切な説明を行った。
5	浜松の歴史や文化を題材とした体験事業を行っている。	必要	－	－	A	・展示や講座等と関連付けた体験学習事業の開催により学習の相乗効果が高められている。	縄文時代の企画展時に縄文時代に関する体験学習を行い、銅鏡づくりやアイロン体験など、常設展と関連付けた体験学習を行っている。
					B	・幅広い層が学びながら楽しめる体験学習プログラムを開発している。	長期休暇を中心に子供・家族連れの参加者が多かった。大人向けプログラムが少ない。

自己評価

分析・課題	◆観覧者数は、本館・分館ともに新型コロナウイルス感染症拡大による影響から若干持ち直している。 ◆常設展のUD化や展示内容の改善を進めているがまだ不十分である。図や解説が少ない、わかりにくいなどの声がある。 ◆企画展はほぼ計画通り実施したが、文章が難解、図や解説が少ないなどの声がある。 ◆体験学習や学校連携事業は、順調に行うことができているが、多数の参加者に対応するため簡略化している面がある。また、子供・家族連れに偏った構成になりがちである。
今後の方策	◆新しい生活様式のあり方について、デジタル技術やオンラインを取り入れながら実施する方法を引き続き検討していく。 ◆常設展、企画展の改善については、来館者に伝わりやすい内容・方法となるように、アンケートや内部の検証により行っていく。 ◆講座や展示解説など来館者と対面する機会を増やして、市民がレファレンスしやすい環境づくりを行う。 ◆体験学習は家族連れの誘客のみならず、展示・講座等と関連づけるなど学習効果を高め、大人向けのプログラムなど幅広い層への拡充を検討していく。

博物館協議会委員からの意見・評価

戦略指標3　展示・教育普及活動

【定量的評価に関する意見】

◆年間観覧者数は新型コロナウイルス感染症の影響を受け、令和２年度には本館2.4万人、分館(計) 1.8万人まで減少したが、令和３年度には本館2.9万人、分館（計）2.1万人にまで回復している。企画展や講座の開催などについても令和元年以前の状態に戻りつつあり、その点は評価できる。学校へ博物館職員が出向く学校移動博物館（職員派遣型）も各地で行われており、天竜区までカバーしておりし、教材貸出件数も以前と同様であり、順調に行われている。満足度に関する指標でも、企画展の満足度75%、体験事業満足度99%となっており、高い数値となっている。総合的にみて、十分に健闘しているといえるだろう。
◆コロナ禍ということもあり、目標値を下回っている項目が多い。対面開催の人数や回数を制限せざるを得ないならば、Webを活用した配信も同時に行うなどの工夫をして、その人数もカウントし、目標達成してもらいたい。
◆人員・予算が限られた中で、各取組に優先順位を付け、効率的、計画的に実施できるよう引続き取組んでほしい。
◆「№6:講座開催件数」では、ギャラリートークと出前講座を含めるべきと感じた。出前講座は指標４で扱われているとはいえ、展示活動に関連する部分の評価はこの指標部分で行わなければならないのではないか。
◆学生（課外授業など義務で訪れる場合以外）の来館者数を知りたい。満足度に関してのアンケートは点数ではなくコメントを重視すると良い。
◆観覧者数の本館と分館の減少率と、分館における企画展開催から推測すると、本館までたどり着けない方がいるのか。観覧者の質についても調査したらどうか。
◆目標値と実績値が乖離している項目が多い。新型コロナウイルス感染拡大の影響と想像できるが、目標値を設定した時点で感染拡大は想定されていなかったのか？
◆新型コロナウイルスの影響を考えれば、これだけの取り組みの実績は素晴らしいと思う。苦労が偲ばれる。

【定性的評価に関する意見・評価】（A達成　Bおおむね達成　Cもう少しで達成　D達成していない）

№.	評価項目	見直しの要・不要	段階評価	委員の意見・評価等コメント
1	本館は、市内の歴史文化について正確でわかりやすい解説が行われており、市内外の人びとが浜松市を理解し、知的好奇心を満たすことができる場である。	必要7人 不要1人	B:4人 C:4人	◆常設展は蜆塚遺跡の縄文時代の展示など十分魅力的で、ギャラリートークなど学芸員の解説を交えて観覧するとより深く理解できるが、足を運んでもらうための広報に力を入れる必要がある。中世、近世、近代がやや手薄であることは仕方がないが、本博物館の強みを再考した上でコンセプトを練り上げる必要があるのではないか。 ◆常設展示については、魅せるための工夫がもう少し必要。 ◆一般市民にとって、博物館は企画展や常設展を見に行く場所。歴史文化に興味のない人でも、楽しくわかりやすい展示が増えると良い。UD化も含めて誰もが行きたいと思わせる場所づくりをして、博物館に足を運んだことが、歴史文化に興味を持つきっかけになると良い。 ◆多文化共生・社会包摂にも配慮した常設展の改修を進めてほしい。空襲後の復興の経過は復興記念館と住み分けているかもしれないが、高度経済成長を経て現在に至る浜松の様子が常設展でわかるように工夫してほしい。 ◆常設展の魅力向上は難しい課題。デジタル配信・イベント企画・物販等多面的に考え、興味を持たれるようにしてほしい。 ◆常設展の魅力向上は引き続き進めていただきたい。 ◆UD化が進まなかった理由は主にどのようなことか。
2	分館は、各地域の歴史文化について正確でわかりやすい解説が行われており、知的好奇心を満たすことができる場である。	必要7人 不要1人	B:8人	◆地域の特色を生かした展示が行われており、時宜にかなった企画展示が行われていたことは評価できる。 ◆情報の更新は優先項目。博物館の信頼にも関わる重要な課題である。 ◆海から山まで、広大な市域の各地域の特色の理解を深めるために、分館相互の展示等の取り組みを。 ◆分館については常設展示の整備・更新（埃がかぶっているような展示も見受けられる）、企画展示のテコ入れなど、まだまだ課題がある。 ◆各地の特色を強く出すのはとても良い。情報が更新されていないのは修正を。 ◆分館だけに任せるのではなく、市全体で広報の支援・周知に努めてほしい。常設の展示更新に期待したい。 ◆分館の認知度は更に低いと感じる。どこに、何があるのか一目瞭然になると良い。 ◆本館の常設展同様、魅力向上に取り組んでいただきたい。

3	(内容変更) 学校の学習内容に即した見学･体験のプログラムを行うとともに、授業を支援する教材を提供している。	必要2人 不要6人	A:7人 B:1人	◆小学3・6年生の学習内容に合わせた見学・体験プログラムが準備され、活用されていることは大いに評価できる。デジタル技術を用いたオンライン上での学習支援を進めることも重要だが、プロジェクトマッピングなど館内におけるデジタル技術の活用も検討してはどうか。 ◆コロナ禍を経てデジタル技術を用いたオンライン学習の重要性は、コロナ前とは比較にならないほど増し、また学校や生徒達のデジタル環境も飛躍的に進歩したため、動画配信やwebページの充実などを進めた方が良い。 ◆タブレットが児童一人に１台貸与されているので、活用して学習支援できる体制を構築することができれば、先端地域となり博物館のアピールポイントになり得る。 ◆動画や子供向けウェブページを作成する際には、学校のニーズをくみ取っていただきたい。 ◆学校との連携は引き続き継続実施を期待したい。収蔵資料のデジタル化とともに、子供向け学習素材の提供をオンラインで実施してほしい。 ◆ニーズ把握は定期的に実施を希望します。
4	(新規)市民に学びの場を提供している。	必要7人 不要1人	B:5人 C:3人	◆常設展や企画展、学芸員の解説やなどで市民に学びの場を提供していることは評価できる。 ◆講座や展示解説の有無で、見学者の展示物への興味関心は全く異なると思う。週末などの開催など回数を増やせないか。 ◆デジタルを活用し、来館者のスマートフォンでQRコードを読み込めば解説が表示、音読されるようなことができれば、要員的な問題も解決でき、解説も最新のものに適時更新できると思う。 ◆講座や展示解説を常時行うのは不可能ではないか。展示の質を向上する等では対応できないのか。 ◆前の項目の「デジタル技術を用いたオンライン上での学習支援」についても同じことが言えるが、来館前の予習や来館後の復習として活用できる「オンライン上でのショート講座」などがあればいいと思う。長時間の講座や解説は、視聴する側も心的ハードルが高いし、作成するのも大変。1講座10分を目安として、YouTubeやTwitterに掲載してゆくという手も考えられる。 ◆気軽に参加できる講座や解説の回数が増えると良い。そのような場があるというアピールも必要。 ◆展示解説（ギャラリートーク）は来館者動向を踏まえて、実施の周知方法や実施回数・時期を勘案して、実施の方向で検討してほしい。 ◆来館者が増える講座やｲﾍﾞﾝﾄを期待する。
5	浜松の歴史や文化を題材とした体験事業を行っている。	必要5人 不要3人	A:3人 B:5人	◆展示や講座等と関連付けられた、幅広い層が学びながら楽しめる体験学習事業の開催は評価できる。 ◆有料でもいいので、質の高い体験学習プログラムを開発し、他の施設との差別化を図ってはどうか。 ◆キャンプブームは続きそうなので、「竪穴住居で宿泊体験」のような大人も子供も一緒に楽しめるイベントがあると良い。 ◆子育て層以外も対象とすることは重要なので、工夫してほしい。 ◆大人向け体験プログラムは需要があると思うので増やしても良いのでは？科学館のプラネタリウムの大人向けプログラムは行列ができるほど人気がある。 ◆体験学習はやっぱり良い。大人向けの学習も期待する。 ◆引き続き体験事業・体験学習プログラムを実施してもらいたい。

【その他意見等】

◆新型コロナウイルス感染症の影響で、来館者は最盛期に比べやや減少しているものの、常設展をはじめ浜松市博物館の展示は縄文遺跡を中心に非常に魅力的なものであり、博物館を訪れる市内外の観覧者の知的好奇心を満たしていると思われる。企画展も魅力的であり、美術館の「民藝展」と時期を合わせた「高林家の展示」も興味深い展示であった。ただ足を運んでもらうための一層の努力をすべきであろう。これから企画されるのかもしれないが、高林家については高林家文書などの史料で地元の歴史を学ぶことができるので、ぜひ学校移動博物館などの資料としても活用していただきたい。
◆デジタル環境の整備、オンラインを利用した学習プログラムを充実させる時期であると思う。
◆一般市民にとっては企画展と常設展＝博物館。せっかくの企画も見てもらわないともったいないので、来館者を増やすための展示方法、テーマ、タイトルの工夫を。職員は手一杯という現状も理解できるので、可能ならば大学生や企画のプロなどからアドバイスを受けたり、力を借りるという方法もある。
◆常設展のリニューアル計画を策定して実行に移してほしい。常設展の更新により、新たな収蔵資料が展示されたり、展示替えが可能な空間にして、来館者増につなげてもらいたい。本館の企画展示室は狭い。常設展のリニューアルと併せて、企画展示室の改修を進めてもらいたい。

戦略指標4　市民協働

・地域を特徴づける資料収集と保管　　・資料データ化と収蔵資料の充実　　・地域の文化を地域で保管活用

定量的評価

No.	内容	単位	R3 目標値	R1 実績値	R2 実績値	R3 実績値	考え方・基準	R3内訳等説明
1	地域団体等と連携した事業の実施件数	件	3	2	1	4	自治会や市民団体等との連携による館内・蜆塚公園・伊場公園を利用したイベントなど（連続するものは1件）	映写会・タケノコ掘り（自治会）、昔話の語り聞かせ（市民団体）、コンサート（市民団体）
2	【新規】市民参加型事業の開催件数	件	2	－	－	2	共同調査、意見聴取型WS、協業などの件数	家康伝承調査事業、蜆塚遺跡WS
3	逸品陳列開催件数	件	5	2	0	1	外部の店舗や施設から依頼を受けて出張展示を行った件数	新型コロナウイルスの影響もあり、積極的周知を行わず。
4	出前講座等開催件数	件	10	7	1	8	依頼を受けて講座に出向いた件数	新型コロナウイルスの感染拡大で1件延期するなど影響がみられた。
5	他団体共催事業件数	件	5	5	7	6	展示、講座、イベント等で調査研究は含まない	中日新聞（新聞切抜作品展）、豊橋市自然史博物館（干支展）、文芸大（型紙展示）、大橋幡岩調査PJT（コンサート）、お話つむぎの会（旧高山家住宅で昔話の語り）、市教育研究会（自由研究優秀作品展）
6	ボランティア参加延べ人数	人	1,000	849	492	442	ボランティアの延べ活動人数（研修除く）	講座や体験の補助、学校見学の案内や補助、展示ガイド、和綿づくりなど
7	ボランティア養成事業開催回数	回	6	4	6	8	講座、報告会、実習等の資質向上に関する事業の開催回数	講座7回、報告会1回

定性的評価　（A達成　Bおおむね達成　Cもう少しで達成　D達成していない）

No.	評価項目	見直し	R1	R2	R3	判断基準	R3説明
1	博物館の事業運営をボランティアなど市民協働で推進している。	必要	－	－	B	ボランティアの募集・育成・活動の拡充を進めている	ポスターやHP等で募集し、養成講座で育成し、体験学習の補助や展示ガイド等を行っているが、人材や内容が固定化している。
					B	ボランティアにインセンティブ（講座等事業の優先利用や個別サービス等）や企画提案の場を用意するなど意欲向上の取り組みを進めている	講座や見学会等開催時には運営補助を依頼しながら優先的に参加させている。また随時意見交換等を行っているが、企画提案には至っていない。
					B	シティプロモーションを意識した事業展開を進めている。	市民の関心の高い事業（家康伝承調査等）を市民協働で実施している。

2	(内容変更)博物館の事業が、新たな文化創造や社会の課題解決に寄与している。	必要	－	－	B	市民団体等の活動に対する支援を行っている。	依頼を受けて、観光ガイドの研修講師を務めたり、学習への助言等を実施している。
					C	社会の課題解決に向けた事業展開を図っている。	視覚障害者等の受入れはソフト面では個別対応しているが、ハード面の対応(音声ガイド、ハンズオン)は行われていない。
3	地域との連携が良好な関係性のもとで行われている。	必要	－	－	B	市民団体等に博物館や遺跡でのユニークベニューでの活用を促進している。	自治会のイベントや映写会などに会場を提供している。
					B	地域との連絡・調整体制が築かれている。	自治会長などには必要に応じて連絡を取り、相談している。
4	各分館が地域の特色を示すとともに課題解決の場となっている。	必要	－	－	B	分館の事業に対する感想や要望を把握し、課題の改善に努めている。	直接または分館担当者を通じて地域の意向や要望を汲み取っている。
					B	分館担当者や指定管理者との定期的な連絡・調整の場を設定している。	年に1回担当者会議を行うほか、随時協議して意向を確認しながら決定している。

自己評価

分析・課題	◆展示解説や体験学習、調査事業など、市民が主体的にボランティア活動や事業に参画する場を設けている。若年層のボランティアも一定数存在するものの、その多くが学生や会社員であることから参画できる日数が限られており、主力層の高齢化が課題となっている。 ◆地域のイベントは次第に再開されているが、新型コロナウイルスの影響が残る。 ◆出前講座やまちかど逸品陳列も、新型コロナウイルスの影響が残り、依頼数は多くない。 ◆各分館では地域に根差した事業が展開されているが、若干の地域差は生じている。
今後の方策	◆意欲的に活動に取り組むボランティアが増えるよう募集方法等を検討する。また令和４年度に創設される文化財サポーター制度の受入れ等も検討し、活動内容の拡充も視野に入れていく。 ◆市民協働事業については、出前講座など、市民の主体的な活動を積極的に支援することで、地域への愛着と誇りの醸成に寄与していく。 ◆社会の課題解決に向けて、博物館の役割の一つであることを意識し、各方面との協働を推進していく。 ◆地域のイベントについては、博物館事業との連携を図るなど、市民主体の文化創造への寄与を続ける。 ◆分館が各地域の課題解決の場となっていくように、引き続き各地域の担当職員や指定管理者との連携を高めながら積極的な事業展開を図っていく。

博物館協議会委員からの意見・評価

戦略指標4　市民協働

【定量的評価に関する意見】

◆映写会・タケノコ狩りや昔話の語り聞かせ、コンサートなど地元自治会や市民団体と協働した事業の実施回数は目標値を超えており、かつうち１件は連続するものとなっており、市民協働が進めれていることがわかる。外部での逸品陳列の件数や出前講座の開催件数は新型コロナウイルス感染症の影響がみられるが、善戦しているものと考えられる。ボランティアについても外出を控えたり人との接触を避けるという新型コロナウイルス感染症対策の側面からはやむを得ない側面があり、妥当な数字であると思われる。
◆新型コロナウイルスの問題はあるが「№1:地域団体等との連携事業」「№2:市民参加型の事業」がもっと増えると博物館への親しみが湧くと思う。
◆「№2：市民参加型事業」は継続的に実施できるかという問題がある。評価対象とするのであれば、単年度ではなく中長期的視野で評価すべき。
◆「№2：市民参加型事業」の開催が継続的に行われると良い。魅力あるイベントの開催がボランティアや集客の数にも繋がると思う。
◆「№3：逸品陳列開催件数」「№6：ボランティア参加延べ人数」などは、新型コロナウイルスの感染状況が落ち着いた場合、目標値に近付いてくるのかを検討する必要がある。ボランティアの人数頼みではなく、養成講座を受けた質の高いボランティアを着実に増やすことで、実施できる活動を増やすという方法も考えていく必要がある。
◆社会情勢から、リアルで人が集まるのが難しい状況が続いているので、「№4：出前講座等」はオンラインを活用するなど、開催方法の選択肢を増やしておくことが重要だと考える。
◆新型コロナウイルスの影響下にも関わらず、これだけの市民協働の実績は素晴らしいと思う。職員、スタッフの苦労と熱意がひしひしと伝わってくる。「№6：ボランティア参加延べ人数」が目標値に達しなかったのは、おそらく新型コロナウイルスの影響下だったからではないか。ただ、ボランティアの「延べ人数」の内訳がわからないので、詳しいコメントができないが、「延べ人数」ではなく、参加されている方の実数は何人なのか。下記の「定性的評価№1」にも関わるが、ボランティア参加者の実数が伸び悩んでいたり、固定化したりしているならば、何かしらのテコ入れが必要だと思う。
◆「№6：ボランティア参加延べ人数」が大幅に減少している。新型コロナウイルスの影響もあると思うが、新規ボランティア獲得に向けた、魅力ある取組みやボランティアが主体的に活躍できる場の提供に努めてほしい。

【定性的評価に関する意見・評価】

№.	評価項目	見直しの要・不要	段階評価	委員の意見・評価等コメント
1	博物館の事業運営をボランティアなど市民協働で推進している。	必要6人 不要2人	B:8人	◆ボランティアの募集を継続的に行い、養成講座で育成したボランティアが体験学習の補助や展示ガイドを行っていることは大いに評価できる。 ◆ボランティア活動において、内容の固定化とは主にどのようなことを指し、その打開のためには何が必要か。具体的な対応策を検討する必要がある。 ◆ボランティアは、退職予定の教員に情報提供し、現役時代のスキルを引き続き発揮してもらうなど、ターゲットを絞った募集方法があっても良い。 ◆ボランティアに任せることのできる内容は限られている。人材の育成は必要だが、内容の固定化は致し方ないのではないか。 ◆若い世代や学生が参加できるボランティア活動を増やしたい。様々な学校の生徒たちが集まるサークル活動的なボランティアチームができたら、交流の場にもなって楽しそう。 ◆幅広い市民がボランティアとして参加することができるような館側の体制を整えると同時に、活躍できる事業範囲を再考し、やりがいのある博物館事業への参加を促してもらいたい。 ◆シティプロモーションを意識した事業展開は、さらに可能性があるかと思う。 ◆市民の皆様が関心が高い事業（展示）は、その歴史に係わっている人の気持ちを考えるからではないか。どの時代/歴史/文化財も携わった人の気持ちが密接に関係している気がする。

2	(内容変更)博物館の事業が、新たな文化創造や社会の課題解決に寄与している。	必要8人	B:4人 C:4人	◆観光ガイドの研修講師を務めたり、市民の疑問に答え学習への助言を実施していることは評価できる。障害者対応のための音声ガイドやハンズオンなどにも対応できることが課題といえる。 ◆博物館事業をより広くアピールし、各種団体の事業活動に博物館のハード面を含めた活用を提案してほしい。 ◆多文化共生、社会包摂など市の政策との連動を踏まえ、博物館事業に取り込んでほしい。 ◆多様な来館者の受け入れのために、音声ガイドなどの対応は必須ではないか。 ◆多言語化も含め、多様な来館者・利用者受け入れに向けた対応に取り組んでほしい。 ◆音声ガイドは、視覚障害者だけでなく万人にとって便利。じっくりと展示を楽しみ、理解を深めてもらうためにも、取り入れられると良い。 ◆視覚障害者関係なく、視覚や聴覚に良い刺激を与える展示企画提案を希望する。 ◆以下の項目にも言えるが、「社会の課題」や「課題解決」という言葉のうちの「課題」が指し示すことの具体性がよくわからない。どういう課題があり、それをどのように解決するかは、課題ごとに違うと思う。「課題」がどのようなものか示されていれば評価もできるが…
3	地域との連携が良好な関係性のもとで行われている。	必要6人 不要2人	B:7人 C:1人	◆蜆塚遺跡を利用したイベントや映写会などに協力するなど地域との連携が良好な関係性のもので行われていることは評価できる。 ◆自治会以外の市民団体等との関係も良好に保つよう取り組んでほしい。 ◆自治会以外の市民団体も博物館や遺跡の利用ができるならば、知らない人も多いと思うので周知させる必要がある。 ◆自治会だけではなく、地域の企業からも要望を聞いて博物館事業に反映させるなど連携を強化してほしい。 ◆ユニークベニューの活用は特別感があって良い。 ◆自治会長などに連絡、相談している内容は何か？
4	各分館が地域の特色を示すとともに課題解決の場となっている。	必要6人 不要2人	B:8人	◆各分館とも、事業に対する感想や要望を聞き改善に努めていることは評価できる。それぞれの地域の特色を出すという意味では本館と分館担当者が一同に集い意見交換する場があると有効かと思う（すでに開催されているかもしれないが）。 ◆分館の役割の明確化や各地域の学校、住民などとの連携を高める仕組みづくりを行ってほしい。 ◆海から山まで、広大な市域の各地域の特色の理解を深めるためにも、分館相互の展示をする等の取組みをしてほしい。 ◆「各分館では地域に根差した事業が展開されている」との自己評価ですが、率直に言って、分館ごとも温度差があり、必ずしも「展開されている」とは言えない様相も見受けられる。ボランティアを含めて、分館での事業の企画・運営にはさらに工夫が必要かと思う。 ◆分館が孤立しないように、市の博物館としてのスケールメリットを活かした取り組みを進めてもらいたい。 ◆あるべき姿（理想）と現状のギャップを克服する為に定期的な連絡調整を。 ◆自己評価で地域差があるとのことなので見直し必要とした。 ◆今後も各分館が重要な役割を果たせるように取り組んでほしい。

【その他意見等】

◆浜松市にとっても、また市民にとっても関心の高い「家康伝承調査」などを実施し、市民協働を実践しながら、事業展開を行っていることは高く評価できる。また継続的にボランティアを募集しその要請に行っていることも素晴らしい。ただ反省点にあげられていたが、人材や内容が固定化していることから、新機軸を打ち出しさらなる市民協働の方向性を模索することや長くボランティアとして働いている人たちからの企画提案を受けるなど、もう一歩進んだ市民協働のあり方を追求するといいのではないか。行政改革のあおりを受けて博物館の人員不足も感じられるので、ボランティアの中から、非常勤職員などを依頼し、職員、特に学芸員の負荷を軽くし調査研究に時間を振り分けるなども必要であろう。
◆博物館と地域との連携を掲げているが、具体的に何を指すのかがわかりにくい。地域が博物館に望むもの、また博物館が地域に望むことについて、具体的に示して欲しい。
◆ボランティアの拡充にも、ボランティアを受け入れる体制を整える必要がある。新規で募集するにも、ボランティア研修など館側の負担が大きくなることが予想される。ボランティア担当を専任で設置するなど人員体制の充実が望まれる。

戦略指標5　情報の発信と公開

・SNSによる情報発信　・多言語対応ガイドシステム導入　・観光訪問者への情報提供

定量的評価

No.	内容	単位	R3 目標値	R1 実績値	R2 実績値	R3 実績値	考え方・基準	R3内訳等説明
1	【修正】SNS更新回数	回	200	－	379	215	ツイッター、インスタグラムの更新回数。各週2回程度の更新目標	ツイッター80件、インスタグラム135件
2	【新規】HPアクセス数	件	200,000	－	－	75,501	博物館HPのトップページアクセス数。広聴広報課で把握。	目標値の半分に満たなかった。トップページ以外からの閲覧数は計測していない。
3	【新規】アップした動画の平均再生回数	回	500	－	－	642	年度内にアップした動画の年度末時点の再生回数の平均値	動画1件「はまはく講座　新発見の浜松城図を読む」
4	報道取り上げ回数	回	200	505	151	84	新聞・ラジオ・TV・雑誌等の取り上げ回数	新聞14回、ラジオ3回、TV9回、雑誌等16回、ネット42回 ※ラジオ定期出演をやめ、ネット媒体への情報提供を厳選したため減少。
5	【修正】刊行物発行部数	部	17,000	－	－	12,900	館で発行する刊行物の部数（ポスター、チラシ、パンフ、カレンダーは含まない）	館報600部、博物館だより2,000部×3回、博物館情報1,050部×6回 ※R3は図録の延期、デジタルスマートシティ推進の取組により減少。

定性的評価　（A達成　Bおおむね達成　Cもう少しで達成　D達成していない）

No.	評価項目	見直し	R1	R2	R3	判断基準	R3説明
1	効果的な情報発信の手段や方法が選択されている。	必要	－	－	A	・過去の実績やアンケート等に基づき、事業の規模や対象に合った情報発信手段（広報誌、ポスター・チラシ、広告、HP、SNS等）を適切に選択している。	子供向け事業の広報は、効果の高いチラシを中心にしており、展示事業はその内容によってチラシの配布先や部数を変えている。 速報性の高いものはSNSを使用する。
					C	・収蔵品検索システム「ある蔵」の、内容の充実と見やすさの改善に努めている。	見やすさや検索しやすさの向上を検討しているが、実施には至っていない。情報量の増加も実施しているが途上である。
					B	・積極的な報道発表を行い、報道機関を通じた情報発信に努めている。	報道発表を実施したほか、インターネットメディア等にも情報提供を行った。効果的な見出しなどを検討する余地がある。

2	市内外の幅広い層に向けて博物館の周知を行っている。	必要	－	－	C	・展示解説やパンフレットなど多言語化への対応を進めている	常設展の英訳の修正検討を行ったが、修正作業はR4年度に持ち越された。外国語パンフレットは未作成である。
					B	・観光施設や宿泊施設等との連携を深め、博物館の広域的な周知に努めている。	チラシやパンフレットを配架してもらい、一部ではSNSで相互にフォローするなど連携している。
					B	・地域の魅力を紹介することで、地域に対する関心を高めることができたか。	展示関連資料や博物館情報等で地域の歴史資源や資料を紹介した。
3	博物館の多様な所蔵資料や活動内容についての情報を発信している。	必要	－	－	A	・刊行物（博物館報、博物館だより、博物館情報等）が計画通り発行されている。	計画通り発行した。
					B	・HP等における事業の動画や資料、収蔵品の情報などにインターネットを活用した来館できない人向けの情報提供に努めている。	R3年度途中から講座の動画配信を開始した（R3は1本）。また、中央図書館の「浜松文化遺産デジタルアーカイブ」と連携し資料の高精細画像の追加公開の検討を始めた。
					B	・SNSでは事業の開催周知だけではなく、日々の活動状況も公開することで、博物館事業への理解が深められるように努めている。	事業告知だけではなく、学校移動博物館の様子や販売グッズの紹介など、幅広い内容で情報を発信した。

自己評価

分析・課題	◆紙媒体（チラシ、ポスター、博物館だよりなど）やネット媒体（ホームページ、ＳＮＳ）など多様な手段で博物館の情報を発信しているほか、新聞・テレビなど報道機関への掲載などにより情報が公開されている。来館者アンケートの結果からは、来館者の情報源は紙媒体の方が依然として多いが、市のデジタル化・ペーパーレス推進の政策や、学校への紙媒体の配布もデータによる配布に切り替わってきており、今後はオンラインによる情報発信に移行する必要がある。 ◆定量的評価５については、上記の点を踏まえると設定を見直す必要がある。 ◆公開されている収蔵品検索システム「ある蔵」は検索のしやすさや見やすさの面で課題がある。
今後の方策	◆企画展示の開催前に展示資料を段階的に情報発信することで、展示に関する期待を高める。 ◆利用が少ない世代や市外の方へ地域の歴史の魅力を伝えられるような、効果的な情報発信をHPやSNSを中心に推進していく。 ◆「ある蔵」の改善を進めるとともに、オンラインでの所蔵資料情報発信の効果的な手段について検討していく。 ◆報道発表時の「見出し」の工夫など、多くのメディアに取り上げてもらえるような情報発信の手法を検討していく。

博物館協議会委員からの意見・評価

戦略指標5　情報の発信と公開

【定量的評価に関する意見】

◆№3の動画「はまはく講座　新発見の浜松城図を読む」の再生回数は目標値を超えて達成されていることは高く評価できる。多くの人が視聴したといえるし、もしくは興味深い動画ということで複数回の視聴もあったものと思われる。現在はyoutubeなどの視聴が多い時代になってきているので、さまざまなニュース、例えば企画展のオープニングの様子や展示の様子なども動画でアップして、PRするようなことも必要ではないかと思われる。№1のSNS更新回数が目標値を達成していることからも努力している姿勢がうかがえる。№2のHPアクセス数などは博物館としてコントロールできる数値ではないので、先に上げたような魅力的な動画やHPを作成することを通して目標達成をめざすほかはないだろう。№5の刊行物の発行部数が目標数値となっているが、目標としては相応しいものとは言えないと考える。目標とするなら、館報を何回発行するか、博物館だよりを何回発行するかなど、種類の方であるが、こちらは定性的評価の№3に入っているので、どちらかでいいのではないか。いずれにせよ発行部数を目標とするのはあまり意味があるとは思えない。
◆目標値の設定は適切であったのか検証が必要。「№1:SNS更新回数」は登録者数の目標値も設定した方がよい。「№2:HPアクセス数」はトップページ以外からの閲覧数の計測は可能か？
◆「№2:HPアクセス数」はトップページのアクセス数のみでは、検索により直接個々のページを訪れた方を見逃してしまうので、数字として意味をなさないのではないか。
◆「№2:HPアクセス数」が気になる。「何を目的として」「誰に向けて」が重要と考える。
◆定量的評価を行い、反省することは次の取組みを決定するにあたり大変重要だが、情報発信の目的は博物館に興味を持ってもらい、来館してもらい、展示物を実際に見て、あるいは体験することだと思う。SNSでは、一つの投稿が大きな話題になることもある。奇をてらう必要はないが、目標数値に捕らわれず市民の興味関心を引き、博物館に関心を持ってもらえるような情報発信を継続してほしい。
◆SNSやHPのアクセス数を増やすのは簡単ではないが、1度話題になるとどんどん広がっていくと思うので、学芸員や職員、あるいはナウミンやシジ丸のキャラクターを前面に出して動画をつくってみたらどうか（ファンを獲得するため）。
◆紙媒体だけの広報ではなく、SNSや動画などと連動したメディア・ミックスを意識した広報展開をはかり、ターゲット層に情報が届いているかどうかの検証も進めてもらいたい。

【定性的評価に関する意見・評価】

№.	評価項目	見直しの要・不要	段階評価	意見・評価等コメント
1	効果的な情報発信の手段や方法が選択されている。	必要7人 不要1人	B:8人	◆広報誌、ポスター・チラシ、広告、ＨＰ、ＳＮＳ等使って適切に広報が行われていると評価できる。ただ「ある蔵」の内容の充実と見やすさの改善が課題である。報道発表を行っている成果であると思われるが、企画展や催しについてのメディア報道もよく目にしており、評価できる。 ◆収蔵品検索システム「ある蔵」は見つけにくい。改善を進めてほしい。 ◆収蔵品検索システム「ある蔵」の見やすさ、検索しやすさを検討しているのに、何故実施できないのか。 ◆収蔵品検索システム「ある蔵」は、現時点でも十分に使い勝手が良く、「B」くらいの評価でも妥当ではないか。 ◆企画展のPRは、タイトル（見出し）とデザイン（ポスターやチラシ）がとても重要だと思う。面白そうと思わせたり、どんな企画なのかな？と興味をそそるようなタイトルとデザインだと目に止まるため、新聞やラジオ、インターネットなどでも取り上げられやすいと思う。 ◆年配の方や興味がある方を別とすれば、チラシや紹介文は、堅苦しくなく見やすく読みやすい（専門用語は注釈を入れるなど）ことを意識すると良い。 ◆今まで博物館からの情報発信に触れたことのない層へのアプローチを考えてほしい。　例えば、小中学校のさくら連絡網を使用して、保護者に対し定期的に情報発信する、特に長期休暇中の体験講座等は広報誌等で意識的に探さないといけないので、一方的に周知するのも有効だと思う。 ◆プレスリリースをメディアに投げ込むなど、積極的な広報展開を図ってほしい。 ◆どこまで、どのような情報が伝わったか調査して現状把握する事も必要。 ◆すでに注意はされていると思われるが、正確かつ誤解の無い情報発信に務めていただきたい。

2	市内外の幅広い層に向けて博物館の周知を行っている。	必要8人	B:5人 C:3人	◆市内外の幅広い層に向けて博物館の周知を行っていると評価できる。展示解説等の多言語化も進められており、観光施設等との連携も行われている。 ◆80ヶ国以上の外国人が在住する浜松市において、展示解説やパンフレットなどの多言語化への対応は早急に行う項目のひとつであると思う。 ◆多言語化にあたっては、英語以外にも対応できるよう必要ならば他館とも協力して進めてほしい。 ◆展示解説やパンフレットなどの多言語化は必要だと思う。とくに外国にルーツを持つ市民も博物館に関心が持てるように、そうした方たちの団体との協働事業として取り組みを検討してはどうか。 ◆多言語化も重要だが、市も一部で取り組みを進めている「やさしい日本語」を導入するなど、今まで博物館を利用していない、利用できない層への働きかけに努めてもらいたい。 ◆歴史文化に興味のない方、博物館に注目していない方に博物館を周知させるには、人がたくさん集まる場所やイベントでの告知、マスコミを利用してのPRがもっと必要だと感じる。 ◆まずは、市内小中学生への魅力紹介と周知に努め、当事者が成長/波及/ﾘﾋﾟｰﾄに繋がることを期待する。
3	博物館の多様な所蔵資料や活動内容についての情報を発信している。	必要7人 不要1人	A:1人 B:7人	◆博物館報、博物館だより、博物館情報等の刊行物が計画通り発行されており、かつ内容も充実していることは大いに評価できる。またHPにおいても情報提供を行っている。 ◆HPから発信する情報について来館への興味を掻き立てるようなものになっていない。予算などの違いはあると思うが、同じ公共施設として浜松科学館のHPは楽しそうな雰囲気が感じられるものとなっている。 ◆刊行物の配布先、配架先を精査して、市民に着実に情報が届いているか、展覧会や事業毎のターゲット層分析と効果的な広報展開を図ってもらいたい。 ◆今までの浜松博物館のイメージを払拭するような情報発信を期待する。（静かにしないといけない、知らないと恥ずかしい、学校で行くからわざわざ行く所ではない）。 ◆資料の高精細画像配信は研究上でも重要であるので、ぜひ継続して進めてほしい。 ◆日々の活動状況公開は、本来業務の妨げにならない範囲で実施してほしい。

【その他意見等】

◆多文化への対応という点では、浜松市には中国やブラジル国籍の市民も多いので、ボランティアを募るなどして多言語での説明ができるといいかと思う。また現在の博物館の展示にはないが、近代の展示のところに、移民の歴史や交流史などをいれるなど、テーマ展や収蔵資料収集とのかかわりもあろうが、検討してみるのも一考かと思う。
◆各世代、各地域、興味のない方にもアピールするためには、インターネットはもちろんのこと、テレビやラジオ、新聞、雑誌など、様々な手段を同時に利用して、いろんな場面で博物館の名前を見たり聞いたりできるようにすると良い。最近浜松市博物館の話題をよく耳にする、というようになると動きが出ると思う。
◆浜松市美術館の展示はTVCMを行っていたが、大河ドラマを利用して家康関連事業を行う施設として博物館の情報も同時に告知することはできないのか。
◆ホームページは市役所の内部ではなく、独自に設け、視認性の高いものを導入してもらいたい。特に収蔵資料の検索ポータルは探し難い。公共財である収蔵コレクションへのアクセスは重要課題であり、力を入れて取り組んでもらいたい。また、ポスターやチラシはデザイナーに入ってもらうなど、より魅力が伝わり、来館を促すようなデザインを心がけてほしい。
◆浜松市のデジタル化・ペーパーレス推進政策があるとしても、そもそも博物館に「来館する」という行為自体がアナログな営為であり、そうした来館者たちが実体性のある紙媒体を求めるのは必然かと思う。オンラインによる情報発信への移行は政策的に必要があるとしても、現時点ではまだまだ紙媒体による「強み」は否定できない。デジタル化への変換を急ぎ過ぎると、これまで博物館に足を運んできた人たちが離れてしまうリスクもある。当面は紙媒体による情報発信や、資料発信なども必要かと思う。
◆博物館のSNSに登録してくれた人にオリジナルグッズなどを配布するなどして、一時的にでも登録者を増やすような取り組みやイベントを定期的に行うのはどうか。